

出品作家プロフィール



Joyce Lam ジョイス・ラム アーティスト、編集者 【RAM 研修生】
香港生まれ、京都市在住。映像やレクチャー、パフォーマンス、書籍の制作を通して「家族」の定義を捉え直す。国や組織が作る複数の家系図を用いた修了制作の〈家族に関する考察のトリロジー〉を、TOKAS-Emerging 2022 の個展として発表（トーキョーアーツアンドスペース本郷、2022 年）、および横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）フリンジ 2021 にて自宅で上演。制作活動と並行して、編集者および Vague Kobe のディレクターとしても活動。2022 年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。2022 年度アーツコミッショナリー・ヨコハマ U39 アーティスト・フェロー。

joycetsin.com
Instagram @joyceshoots

「A Windy Day」

2026 | Single-channel video | HD | Colour | Audio | 00:04:18

公園を行き交う人々の姿を反復的に捉えながら、私たちの「見る」という行為が、どのように分類や判断へと変換されていくのかを問いかける映像作品である。



歩行や身振りといった反復される行為に対し、言葉は選別し、名付け、意味を固定する。映像に挿入される言葉は、注釈や補助情報のように断片的に現れ、本来は理解を助けるための言語でありながら、本作では関係性や役割を即座に安定させてしまう装置として機能する。その過程を通して、観る者は自らが無意識のうちに他者の関係性を読み取り、ラベルを与えていていることに気づかされる。



山科 晃一 Koichi Yamashina 映画監督 【RAM 研修生】

テレビ局勤務後、2019 年東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻修了。映像制作会社、広告会社を経て、CM・VP・PR・展示映像などの数々の映像ディレクションを手がける。また、映画監督・脚本家として活動しており、近年の作品に『不完全なわたし』（大阪アジアン映画祭 2025 プレミア上映）、『河童になる』（福井駅前短編映画祭 2025 優秀賞）、『蒔く愛』（ギャラリーN 映画展準グランプリ）などがある。

<https://yamashina7961000.wixsite.com/my-site-1>

「鳥籠の中の人々」

2025 | Single-channel video | FHD | ステレオ | 00:14:52

日本野鳥の会の創始者であり、歌人・詩人、また深大寺の僧侶でもあった中西悟堂（1895-1984）は、「野の鳥は野に」という思想のもと、籠の中で愛玩や狩猟の対象とされてきた鳥を自然へ解き放ち、野外で観察し楽しむことを提唱した。「野鳥」という言葉を生み出したのも悟堂である。

本作は「野鳥を観察する」という人間の振る舞いそのものを主題とし、観察する者が同時に観察されているという関係性を描き出す。人間の行為を反復・模倣する「役者」という存在を用い、同じ芝居を繰り返すことで、鳥が籠から解き放たれる一方、人間は「観察」という振る舞いの籠に閉じ込められているという視点を立ち上げた。悟堂が散歩道としていた野川周辺をフレーミングし、フィクショナルな「観察映画」を創出する。





尹苑 Yin Yuan アーティスト 【RAM 研修生】

1993年中國上海生まれ。シカゴ美術館附属美術学院（SAIC）視覚伝達専攻を修了後に渡日し、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻を修了。現在は同大学博士後期課程に在籍。パフォーマティブ・インスタレーションを軸としたミクストメディア表現を通じて、他者や環境（外部）から個人意識（内部）への見えない束縛と、内部から外部への条件反射や内在化の過程を具現化する。無意識に重複する習慣やルーティン化された日常行為をモチーフに実践を展開している。

lookslikekeyinyuan.com
[instagram @lookslikeyinyuan](https://www.instagram.com/lookslikeyinyuan)

「Departure: The First Exercise and the Last (出発：最初と最後の練習)」

2025 | Single-channel video | HD | Color | Audio | 00:10:06

本作品は、「理想の家」を象徴するドールハウスのようなインスタレーションが、1ヶ月の展示期間中に行われた3回のパフォーマンスによって段階的に解体され、ゴミ収集日に段ボールの資源ごみとして回収されるまでのプロセスを記録した映像である。

虚構として価値を与えられた一つ一つの造形物としての「箱」が、再び素材としての「箱」へと還元され、現実の時間軸に戻り、制度に触れ、そして他者の手に渡る——その瞬間とは何を意味するのだろうか。



上野 貴弘 Takahiro Ueno 映像作家 【RAM 研修生】

1989年愛知県生まれ。映像作家。信仰と共同体形成、他者の表象と語り方に関心を持ちながら、主に映像作品を制作しています。自分ではない誰か（他者）のことをメディア（媒介）を使って語る時に、非当事者の立場から何を語ることができて、どのような距離感と話法で語るべきなのに興味があります。名古屋工業大学建築・デザイン工学科卒業。エディンバラ大学大学院修了（MFA in Film Directing）。

takahiroueno.net
[@Ace_takahiro
\[instagram @takahiro_ueno7\]\(https://www.instagram.com/takahiro_ueno7\)](https://twitter.com/Ace_takahiro)

「Still Alive Before Stillness」

2026 | Single-channel video | HD | Colour | Stereo | 00:05:14

遺影用のポートレートを、一枚だけ撮影することにした。撮影時、スチルカメラのレリーズは被写体に手渡され、自身の準備が整ったと感じた瞬間にシャッターを切ってもらう。私はシャッターが切られるまでの時間をビデオで記録し、切られた時点で撮影を終える。



このポートレートは、遺影になるかもしれないし、ならないかもしれない。遺影とは、生き残った他者が死者の写真のアーカイブの中から選び取る像だからだ。遺影として撮影された写真であっても、その像が遺影になるかどうかは、撮られた本人の手を離れて決まる。

ロラン・バルトは『明るい部屋』で、写真のノエマは《それは=かつて=あった》であると述べている。被写体が現実に存在していたことを証明すると同時に、それがいずれ失われることをも告げる。そこでは、すでに死んでしまった過去と、これから死ぬ未来が、ひとつの像の中に圧縮されている。

私が関心を抱いたのは、その圧縮が起こる直前の時間だ。シャッターが切られるまでの時間は、過去と未来の死がまだ一枚の像に圧縮されていない宙づりの状態にある。身体は、まだ終点の定まらない時間の中に置かれている。



池添 俊 Shun Ikezoe 映画作家 【RAM 研修生】

1988年香川県生まれ、大阪府育ち、東京都を拠点に活動。

映画作家、アーティスト。普段社会や歴史の中で声が残されない者たちの映画を作るため、個人の話や記憶を収集し、普遍的な物語へと再構成する。フィルムとデジタルなど、様々なメディアを用いた映画やインスタレーション作品を発表し、映画と現代美術の領域を横断しながら、国内外で活動を展開している。

令和6年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業に採択され、現在は精神疾患をテーマにした作品を制作中。精神疾患と社会の境界を探る『声を待つ』(2022)は、公募展「MIMOCA EYE」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2022)にて高橋瑞木賞を受賞。『あなたはそこでなんて言ったの?』(2021)は「第59回ニューヨーク映画祭」、『朝の夢』(2020)は「第31回マルセイユ国際映画祭」などで上映されている。

shunikezoe.com
[instagram @shun_ikezoe](https://www.instagram.com/shun_ikezoe)

「きっとうまく話せない」

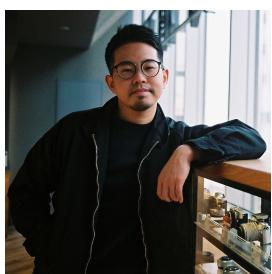
2026 | 8mm film, digital | color | sound | 00:12:46



その人が言葉を発しなくなつてから数年が経つ。長電話が好きだった彼女から、わたしの携帯に着信が届くことはもうない。かつて見舞いに訪れた際、主治医は「彼女は現実世界よりも、夢の中にいたいのかもしれない」と言った。夢は記憶の再生産だと言われるが、彼女はいま、どんな夢を見ているのだろうか。

彼女の入院から2年後、パンデミックが起り、面会はできなくなつた。わずか数年の時間の隔たりのなかで、わたしはその声を忘れかけている。ホームビデオから聞こえてくる彼女の声は、何度もわたしの名前を呼んでいるのに、わたしはそれに返事をしなかつた。もう遅いかもしれないが、いまわたしが呼びかけたら彼女はそれに応えてくれるだろうか。

2021年、母の日。彼女が行きたいと言っていた街で、薄紫色のトルコキキョウを買い、久しぶりに電話をかけてみる。夢から醒めてほしい気持ちと、安らかに夢を見続けて欲しいという気持ちと共に。



藤井 翔太 Shohta Fujii 撮影監督 【RAM 研修生】

撮影監督。ロサンゼルスの American Film Institute にて撮影を学ぶ。日本およびアメリカを拠点に、映画、TVC、ドキュメンタリー、企業映など幅広い分野で活動。2025年に最年少の日本映画撮影監督協会の正会員となる。映画におけるストーリーテリングと現代アートの境界に関心を持ち、現実に生きる人や動物の存在を通して、物語を説明するのではなく、佇まいや時間の積み重ねによって観る者の感情や理解が立ち上がる映像表現を探求している。

shohtafujii.com
[instagram @shohtafujii_jsc](https://www.instagram.com/shohtafujii_jsc)

「馬影」

2026 | Single-channel video | HD | Colour | Audio | 00:12:30

競走馬としての役割を終えた馬の多くは行き場を失い、やがて社会の表舞台から姿を消していく。中には、肉として売られる可能性もある。本作は、そうした馬たちを引き取り、世話をしながら新たな役割を与える人々に焦点を当てたドキュメンタリーである。かつて勝敗や記録によって価値づけられていた馬たちは、競馬場の外で異なる時間の流れの中を生き、映画という場において新たな存在として姿を現す。カメラは馬の過去や成績を語るのではなく、現在の姿に静かに寄り添う。馬とともに歩き、触れ、手入れをする日常の行為を通して、世話をする人間の側にも変化が生まれていく。最後にスクリーンに映るのは、すでに亡くなった一頭の馬である。映像の中でその姿は繰り返し立ち現れ、映画の中で生き続けている。本作は、スタント馬と関わった人々の時間や関係性を記録し、競走のあとにも続く馬の生のあり方を記録する。





斎藤 大幹 Hiroki Saito アーティスト／映像作家 【RAM 研修生】

東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士課程修了。NHK にて番組制作およびデジタル展開に携わり、のちに LINE ヤフー株式会社で Yahoo!ニュースの編集・サービス開発に従事。現在は立命館大学映像学部准教授。コミュニケーションデザイン／メディアデザインを専門に、テクノロジー・メディア・社会の関係性を横断的に捉えながら、映像表現の新たな可能性を探求している。研究・教育と並行して、アーティストとしても制作活動を行っている。

「サイレント」

2025 | Single-channel video | HD | Color | Audio | 00:04:06

本作品は、あるろう者の男性の人生を、短いエッセイとして描くパフォーマンス作品である。手話の動きや沈黙、視線、間といった非言語的な表現を通して、個人の経験が社会の中でどのように置かれているのかを示す。



舞台は駅構内の雑踏である。男性のパフォーマンスは人の流れの中に置かれ、ときに埋もれ、ときにすれ違いながら展開される。行き交う通行人たちも意図せずフレームに入り込み、匿名性や無関心といった社会の空気とともに、作品の一部を形づくる。

本作は、彼の人生をわかりやすい物語として理解させることを目的としない。観る者が安易に「わかった」と感じることを避け、意味が十分に共有されない状態をあえて保つ。後半、映像はサイレントへと移行し、そこで表現されている内容を作者自身も知ることはない。翻訳や説明を介さずに提示される手話のパフォーマンスは、「理解すること」ではなく、「向き合うこと」そのものを観る者に静かに促す。



武政 朋子 Tomoko Takemasa アーティスト 【RAM 研修生】

他者の語りや写真を起点に社会の中で「私を個とするものは何か」という考察を軸に制作を行う。光源の上で印刷物を濡らし、消失しながら立ち現れる像を撮影する方法を用いて不確かさの表出を試みている。主な展覧会に「その容れ物は私ですか」（東京アーツアンドスペース本郷、東京、2025）、「IAMNOWHERE」（旧ユースタイルビル、青森、2025）、

「UNKNOWN」（Arai Associates、東京、2023）、Drawing with different eyes（Arai Associates、東京、2023）、I always wish you good luck（アートプラグヨンス、韓国、2022）など。

tomokotakemasa.com

「Hello Hello Hello , Me?」

2025 | Single-channel video | HD | Color | Audio | 00:09:03

今作はそれぞれの「私」を可変的な存在であると捉え、その揺らぎと変化を反復と重複により緩やかに描き出し、「個」の不確かさについて考察する。映像では、普通紙に印刷した2枚の写真を光源の上に裏返して重ね、水で濡らしていく様子を撮影した。2枚の写真的うち1枚は今作の語り手本人から提供してもらった写真、1枚は作者が彼女を撮影した写真である。水で濡らすことによって図像は鮮やかに現れるが、その姿は固定されず、インクは流れ落ちていく。この映像はイメージの出現と消失が同時に起こるという矛盾した状態の記録ともいえる。生成される光景が、元の図像から穏やかに離れていく過程を追ったものである。そこに重なるのは語り手が自身のポートレートを見ながらとりとめのない話をする声である。その語りは一度話してもらった内容を何度も繰り返してもらう行程で収録された。台本はなく、記憶を頼りに語るため、少しずつ内容も言い回しも変化していく。それらの反復による差異を重ね合わせることで、言葉は意味から遠ざかたり不意に近づいたりしながら、目の前の風景の均衡をわずかにずらしていく。出会いを重ね、通り抜け続け、見知らぬ「私」を見つめる試み。





松本 桂 Kei Matsumoto 映像作家 【RAM 研修生】
2022 多摩美術大学絵画学科油画専攻 卒業
2025 東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻 修了

「三和土」

2025 | Single-channel video | 4K | Colour | Audio | 00:34:56

本作は、2025年7月、山口県萩市にある国指定重要文化財 熊谷家住宅 にて撮影された。

三和土と呼ばれる日本の伝統的な技法によって土間が修復されていく過程を記録している。三和土とは、水と石灰を混ぜた土を木槌で無数に叩き締めることで硬化させる工法であり、近年ではその技術を継承する職人は減少している。本作はインタビューやナレーションを用いず、代わりに、絶え間なく響く木槌のリズムや、碎かれ、練られ、固められていく土の形状変化のみに焦点を当てている。技術を後世に伝える記録であると同時に、それを超えて、一つの自律的な運動体として再構成することを目指した。



Ikhyun Gim キム・イキョン アーティスト 【国際招待作家】

1985年韓国釜山生まれ、韓国水原在住。

見れない世界や見えない世界、見ても分からず世界を写真で捉えようと試みる。ナノメートル単位の次元で起きていること、グローバル・バリューチェーンの力学によって生まれた秩序、光の速さでしか説明できない時間など、極度に小さくて巨大なものや、近くで遠い事象によって交錯する世界を記憶し、想像し、観察する。見ることと写真として残すことの関係を推し量り、その関係性によって生まれる世界を定義し直そうとする。

これまで、京畿道美術館(2020, アンサン)での個展のほか、昌原彫刻ビエンナーレ(2024)、アルコ美術館(2022)、釜山ビエンナーレ(2022)、ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ(2016)など、国内外の展示に参加。アートスペース「nowhere」(2015-2016)、展示・イベント「The Scrap」(2016-2020)の主催・運営にメンバーの一人として携わった。

instagram @kimkhimgim/

「MINIM MINIM」

2021 | Single-channel video | color | Sound | 00:17:46

MINIM とは、二分音符(half note)の意味である。この単語は、後ろからも読んでも意味が伝わる回文になっている。この二つの単語が並ぶと、二つの二分音符は四拍子となり、それは楽譜上で曲を構成する最小単位、つまり一小節になる。並んだ同じ単語は一つの世界であり、これから繰り広げられる時間の起点となる。

本作は、アルコ藝術劇場四十周年を記念するアーカイヴ・プロジェクト「夜のプラットフォーム」(2021、企画：ヒョン・シウォン)の委託制作として紹介された。何人もの無名のカメラマンが、40年に渡って劇場の内外を記録した写真の山やデータを見ているうちに、途方に暮れてしまった。数十万枚、いや、数百万枚以上の写真を全部見ることもできず、見たとしても全て憶えられなかった。一枚一枚は一瞬を切り取っているが、その一瞬の塊は大きく重かった。本作を制作しながら、写真を見る行為の重さについて考えさせられた。なぜ写真は重いのだろうか。その疑問に答えるべく、私は軽い写真の秘めた重さから、軽い写真の方へと視点を移して考えてみた。しかし、タイトルが回文だからだろうか、写真は今もなお重くて軽く、また軽くて重いまだ。



今、以前と以後は残っている。消えてしまったものや、まだないもの。それは、以前の今で、以後の今である。この劇場で、一時に生まれては消えてしまった前後の時間を、見ようとした。音の終わりから、音のはじまるときに、立ち戻ってみると。それができるのは、演奏した曲の楽譜が存在し、演奏している様子を写真や映像に収めたものや、文書として残っているからだ。私は、アーカイヴと劇場の音を音の速さで動かしてみて、その動き方を観察することにした。音は極度に短く、早く動くため、時間を小刻みにして観察する必要がある。目には見えなくても、早く動く音の速さを捉えようとした。カメラのシャッタースピードを上げて雨粒を撮影するのと同じように、時間を細分化し、小刻みになった時間を引き伸ばして見る。そうすることで、一瞬は一秒、一分、一時間、一年、そして40年になるであろう。その昔、劇場に溢れていた音は、どんな形をしていたのだろうか。



國友 勇吾 Yugo Kunitomo 映像作家 【RAM 研修生】

1983年石川県生まれ。日本映画学校（現・日本映画大学）卒業後、フリーの映像制作としてドキュメンタリー映画、教育映像などの制作に携わる。
映画『春を告げる町』（2020年・島田隆一監督）に助監督として参加。2022年、映画『帆花』（初監督・長編第1作）が劇場公開。

honoka-film.com

「こころはどこに存在するのか」

2026 | Single-channel video | HD | Colour | Audio 00:18:56

超重症児（者）と呼ばれ、意思疎通も難しいとされる帆花さん。その帆花さんと共に暮らしてきた母・理佐さんが過去に綴っていた「ひとのこころはどこに存在するのか」という言葉が、出会って10年以上が経つ現在でも、ずっと私の中にあり続けていた。本作はその問い合わせとともに、ケア、言語・非言語のコミュニケーション、相互性といったキーワードを念頭に置きながら制作した。



帆花さんに限らず、決してすべてを理解することのできない存在としての「他者」がいる。その距離やわからなさを見つめながら、他者といかにつながっていくことができるのかを考えた。倫理的な側面を踏まえつつ、映像イメージがその溝を越え、ドキュメントという枠組みからも離れたかたちで、どこまで思考を変容させるのか。その可能性について考察した。



安田 朱里 Akari Yasuda アーティスト 【RAM 研修生】

広島県出身、ドバイ在住。出版社勤務を経て、2018年にロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ ファインアート学部を卒業。2021年より UAE を拠点に活動。映像制作、ビデオインスタレーション、サウンドアーティストとの協働を主軸とし、リサーチベースの作品を制作する。映像作品は The TENT Academy Awards 2018（ロッテルダム）、Festival des Cinémas Différents et Expérimentaux de Paris 2022（パリ）にノミネート。2024-2025年、アート・ジャミールおよびドバイ文化庁による研究実践プラットフォームに採択。

akariyasuda.com
[instagram @akariyasuda_](https://www.instagram.com/akariyasuda_)
[@akariyasuda_](https://www.x.com/akariyasuda_)

「ハイパー・パラサイト」

2026 | Single-channel video | HD | Colour | Audio | 00:08:44

本作は、マイクロプラスチックを分解する酵素『PETase』を起点に、プラスチックの原料である石油の産地、UAEで展開される。石油は、数百万年前に海底へ沈んだ微生物の死骸が、長い時間を経て形成された化石燃料である。プラスチックはしばしば廃棄物と見なされるが、本作では産業システムの循環そのものに寄生する副産物として捉え、さらにそれを食べる「ハイパー・パラサイト」の糧として、別の関係を結び直す。



説明的な語りは用いず、微小プラスチックペレット、ナイロン袋の切れ端、タイヤ摩耗粒子、10世紀キャラバン宿跡の石材が風化して現れた貝殻の塊など、異なる眼のもとで立ち現れる物質の姿を、詩と音楽によって構成している。ラクダの眼は非人間の知覚として、詩と顕微鏡映像の双方に配置されている。

英国の海岸のプラスチックごみを扱った映像作品『キメラ』（2018年）の続編として制作され、海だった地層、遊牧的記憶、急速に発展する人工的都市などが重なり合う UAE の土地において、視座が揺らぐ状態が立ち上がる。

観客は、可視化された物質が自身の体内にも既に及んでいる可能性を前にして、環境と身体の境界をめぐる問いに置かれる。



トモトシ Tomotsoi アーティスト 【RAM フェロー】

1983年山口県出身。大学卒業後、数年にわたり建築設計・都市計画に携わる。2014年よりアーティストとしての活動を開始。「都市に偏在する決まりごとに介入する実践」として、映像やパフォーマンスを制作している。また2020年よりトモ都市美術館を開設・運営し、「新しい都市の使い方」を提案している。

tomotosi.com

「午後に見えた景色」

2025 | Single-channel Video | HD | Colour | Audio 00:08:58

昼過ぎのフィリピン・カリボの街で遊ぶ子供たちが、100ペソで自分の好きなものを買ってくる一連のシークエンスの記録。



玄 宇民 Hyun Woomin 映像作家／アーティスト 【RAM フェロー】

東京生まれ。近現代史を背景に生まれた地を離れた人々のありようと移動の記憶をテーマに映像作品を制作。主な作品に『to-la-ga』(2010)、『OHAMANA』(2015)、『未完の旅路への旅』(2017)、『逃島記』(2019-2022)など。ソウル独立映画祭(韓国)、「Young Korean Artist 2021」(韓国国立現代美術館、果川)、ソウル市立美術館、TOKASなどで作品展示・上映。東京大学文学部美学芸術学専修卒業。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士、同博士後期課程修了。

woominhyun.com
[instagram @woomingen](https://www.instagram.com/@woomingen)

「残像旅行」

2024 | Single Channel Video | Color | Sound | 00:48:00

前年の民主的選挙により軍事政権が終わりを迎えるソウルオリンピックが開催された1988年。その直前までを韓国で暮らした母、日本で生まれ留学を機に12年を韓国で過ごした父、乳幼児期を過ごした作者。その三者が現在とは大きく異なる韓日を行き来する中で感じたことを語り、カメラはその残像を記録する。





Eric Baudelaire エリック・ボードレール 映画監督・アーティスト 【国際招待作家】

1973年アメリカ、ソルトレイクシティ生まれ。フランスを拠点にする映像作家、ビジュアルアーティスト。近年は、ガスワークス（ロンドン）、アーマンド・ハマー美術館（ロサンゼルス）、エリザベス・ディー・ギャラリー（ニューヨーク）、ガレリア・フアナ・デ・アイスブル（マドリード）、ギャラリー・グレタ・メルト（ブリュッセル）などで個展を開催している。直近の展覧会に、トリエンナーレ「極度の親密性（Intense Proximity）」（キュレーター：オクワイ・エンヴェゾー）、ドキュメンタリー・フォーラムⅡ「盲点（A Blind Spot）」（キュレーター：カトリーヌ・ダヴィッド）、台北ビエンナーレ（キュレーター：アンセルム・フランケ）、ペイルート・アート・センターでの個展などがある。作品は、ホイットニー美術館、ポンピドゥー・センター、フランス国立現代美術コレクション、FRAC オーヴェルニュなど、複数の公立コレクションに収蔵されている。

「重信房子、メイと足立正生のアナバシス そしてイメージのない27年間」

2011 | Super 8 mm and HD video | Color and BW | 00:66:00

本作では、日本赤軍の政治的かつ個人的な叙事詩が、未知へと彷徨いながら、故郷へと回帰する旅路、「アナバシス」として語り直される。1968年以降のイデオロギー的熱狂の真っ只中にいた東京からペイルートまでの旅路、そしてその「赤い時代」の終焉でみたペイルートから東京までの旅路。二人の登場人物によって、約30年にわたる革命左派の急進的少数派の軌跡が語り直される。この少数派の発起人だった重信房子の娘・重信メイは、その過程を間近で目撃していた。レバノンで極秘で生まれた彼女は、27歳になるまで地下での生活しか知らなかった。しかし、母が逮捕されると、突如、公の存在として生きなければならなくなり、彼女の第二の人生が始まった。他方で、日本の伝説的な映画監督・足立正生は、映画制作を止め、1974年に日本赤軍と合流してパレスチナに身を投じた。風景論（風景を撮影することで、偏在する権力構造を暴こうとした作家たちによる運動）の論者でもあった足立にとって、自発的な亡命を行なった27年間はイメージのない時間だった。なぜなら、レバノンで撮影した映像は、戦争中に三度にわたって破壊されてしまったからである。

『重信房子、メイと足立正生のアナバシス そしてイメージのない27年間』はそのため、言葉、証言、記憶（そして偽りの記憶）によって構成される。二人の語りが折り合い、個人的な物語や政治的歴史、革命的プロパガンダ、そして映画理論が作品のなかで交錯する。30年にわたって行われた自己を見つめ直す作業で反復される中心的な主題は、イメージの問題である。すなわち、テレビの影響が強い時代に計画されたテロ行為に、メディアが反応し、生み出した公的なイメージと、闘争の混乱のなかで失われ、あるいは破壊されてしまった個人的なイメージである。実験的ドキュメンタリー映画の手法を採用し、スーパー8mmフィルムで新たな風景論的イメージとして撮影された、現代の東京とペイルートが重信メイと足立正生の語りに重なる。



Jiyoung Yoon ユン・ジョン アーティスト 【国際招待作家】

社会的・文化的に受け入れられるごく普通の経験の中で覚えた違和感をきっかけに、制作をしている。個人が状況や出来事を受け入れるときの態度や、「より好ましい」状態を維持するうえでの「努力」をテーマに掲げ、隠された内面や内部構造を様々なかたちで作品に表現している。近年参加した展示には「Seeing Things the Way We See the Moon」(daadgalerie, ベルリン, 2025)、「Korea Artists Prize 2024」(MMCA Seoul, ソウル, 2024)、「This Event」(SeMA, ソウル, 2020)、「Night Turns to Day」(Art Sonje Center, ソウル, 2019)などがある。



jiyoungyoon.com/
Instagram @jiyoungyoon_sculpture



「Choropedaó」

2024 | Single-channel video | color | sound | 20'34

ホロピダオはギリシャ語の *Xoροπηδω* を韓国語読みにしたタイトルで、日本で言うスキップのことを指す。歩行とジャンプの間の動きを表すこの単語は、言語が変わると存在しない場合もある。だが名称の有無にかかわらず、見ればその動きがどんなものかは分かる。ユン・ジョンは、表には現れないが重要な構造に興味を持ち、制作を続けている。本作では言語と宗教、物理的距離を越えた四人の友人と一緒に、互いの健康と無事を願う様子が映し出される。フェイス・キャスティング、ワックス(蝋)で作られたエクス・ヴォート(ex-voto, 捧げもの)、エジソン式蓄音機の蝋管を参照しながら、ユン・ジョンは物語を展開してゆく。韓国語で書かれた台本は英訳されたのちに、ギリシャ語・スペイン語・フランス語に翻訳され、作家の友人四名によって読まれた。4名のうち2人は母国語と母語が同じだが、ほかの二人は母方の言語が自国の言語と一致しない。



潘 逸舟 Ishu Han アーティスト 【RAM フェロー】

映像、パフォーマンス、インスタレーション、写真などのメディアや身の回りの日用品などを用いて、共同体や個が介在する同一性と他者性について考察する作品を発表している。幼い頃に上海から青森に移住した経験を持つ自身の視点をベースに、切り取られた日常風景の中に自らの身体を介入させ、社会と個の関係の中で生じる疑問や戸惑いを、真摯に、時にユーモアを交えて表現する。

「戻る場所」

2011 | Single-channel video | HD | black and white | Audio | 00:06:51



2011年、私は東京から青森まで自転車で向かった。太平洋沿いを転々としながら、北に向かう私の身体は、重力ではなく住んでいた土地の引力に引っ張られているかのようであった。途中で偶然にも、ボランティアをする同じ小学校を卒業した年配の方に遭遇した。その出会いは、私たち人間にも隠された引力があると確信した時間であった。初めて通る土地の海は、いつものように波が押し寄せ、何ごともなかったかのようにどこかへと消えてゆくことを繰り返す。無限に押し寄せる波にも、戻る場所はあるのだろうか。



Bruce Conner ブルース・コナー アーティスト 【国際招待作家】

1933年アメリカ、カンザス州生まれ。2008年サンフランシスコにて没。彫刻、コラージュ、絵画、そして映像作品を制作した、戦後アメリカを代表するアーティスト。カリフォルニアのアートシーンからキャリアを始め、アメリカの拡大する消費文化や核攻撃による終末的状況における恐怖にいたるまで、戦後のアメリカ社会にまつわる題材を作品にしてきた。参加した展覧会には、1961年にニューヨーク近代美術館(MoMA)で開催した美術史に残る展覧会「The Art of Assemblage(アッサンブルージュの芸術)」など数多くある。回顧展は、2000年にミネアポリスのウォーカー・アート・センターで開催され(その後、フォートワース現代美術館、サンフランシスコのM.H.デ・ヤング記念美術館、ロサンゼルス現代美術館へ巡回)、さらに2016年にはニューヨーク近代美術館で開催され、カリフォルニアのサンフランシスコ近代美術館およびマドリードのソフィア王妃芸術センターへと巡回した。作品は、メトロポリタン美術館、ホイットニー美術館、ワシントンD.C.のナショナル・ギャラリー、パリのポンピドゥー・センターなど、多くの公立コレクションに収蔵されている。

「Crossroads」

1976 | Single-channel video | HD | black and white | Audio | 37:00



「クロスロード作戦」とは、1946年から1958年にかけてアメリカがビキニ環礁で実施した23回の核兵器実験のうち、最初の2回を指す。この2回の実験で、長崎に投下された原子爆弾に相当するTNT火薬約2300万トンの威力を持つ兵器を爆破した。実験場の周りには700台以上のカメラと、約500人のカメラマンが配置された。この実験のために、世界に存在する約半数のフィルムがビキニ環礁に集められ、この爆破実験が歴史上もっとも徹底的に撮影された瞬間となつた。

「1946年7月25日にビキニ環礁で行われた最初の水中原爆実験「ベーカー核実験」の、機密解除された国立公文書館の映像からコナーは、強烈な美を見出した。ひとつの爆発を、空・海・陸という異なる視点から、速度や距離を変えて捉えた23のショットに、パトリック・グリーソンとテリー・ライリーによる魅惑的な二重の音楽が合わさる。そうして破滅を、キュービズム的宇宙規模の崇高へと昇華する。」——ジョシュ・シーゲル(MoMA、映画部門キュレーター)